

花間文字

泉鏡花

青空文庫

晩唐ばんたう一代いちだいの名家めいか、韓昌黎かんしやうれいに、一人いちにんの猶子いうし韓湘かんしやうあり。江淮かうくわいより迎むかへて
 昌黎しやうれい其の館そやかたに養やしなひぬ。猶子いうし年少しじわかうして白晳はくせき、容姿ようあ恰あたも婦人ふじんの如ごとし。然しかも其の行おこなひ放
 逸ういつにして、聊いさも學かまぶことをせず。學院がくゐんに遣つかはして子弟していに件ともなはしむれば、愚ぐなるが故ゆゑに
 同窓どうさうに辱はづかしめらる。更に街西がいせいの僧院そうゐんを假かりて獨ひとり心こゝろ靜しづかに書しよを讀よましむるに、日
 を經ふること纔わづかに旬じゆんなるに、和尚をしやうのために其の狂きやう暴ぼうを訴うつた。仍よつて速すみに館やかたに召返めしかへ
 し、座ざに引ひいて、昌黎しやうれい面おもてを正ただうして云いふ。汝なんぢ見みずや、市肆ししの賤せん類るゐ、朝暮てうぼの營いみに齷あ
 齷くさくたるもの、尚なほ一事いちじの長ちやうずるあり、汝なんぢ學なまばずして何なにをかなすと、叔公をぢさん大目玉おほめだまを食くら
 はず。韓湘かんしやう唯々あゝと畏かしこまりて、爪つめを嚙かむが如ごとくにして、ぽつ／＼と何か撮なんで食くふ。其の
 狀さま我が國くにに豌豆ゑんどうを嚙かるに似にたり。昌黎しやうれい色いろを勵はげまして叱しかつて曰いはく、此かくの如ごときは、そ
 も／＼如何いかなる事ことぞと、奪うばつて是これを見みれば、其の品しな有ある平糖へいたうの缺かけらのごとくにして、あらず、
 美うつくしき桃もの花片はなびらなり。掌たなを落そせば、ハラハラと膝ひざに散ちる。時ときや冬ふゆ、小春日こはるびの返かへり咲ざきにも
 怪あやし何處いづこにか取とり得えたる。昌黎しやうれい屹いきつと其の面おもてを睨にらまへてあり。韓湘かんしやう拜謝はいしやして曰いはく、
 小姪せうてつこ此の藝げい當たうごさ候よ。因よりて書しよを讀よまず又また學まなばざるにて候さふらふ。昌黎しやうれい信まこととせず、審つまびらに
 其の仔細しさいを詰なれば、韓湘かんしやう高たからかに歌うたつて曰いはく、青山せいざん雲水うんすゐの窟くつ、此この地ち是これ我が家いへ。

子夜瓊液しやけいえきをそんし、寅晨降霞いんしんかうかをくら咀ふ。琴は碧玉へきぎよくの調てうを弾たんじ、爐ろには白珠はくしゆの砂すなを煉ねる。寶鼎はうてい金虎きんこを存そんし、芝田白鴉しでんはくあを養やしなふ。一瓢いつぱうに造化さうくわを藏さうし、三尺さんじやく妖邪えうじやを斬きり、逡巡しゆんじゆんの酒さけをつく、また能く頃刻けいこくの花はなを開ひらかしむ。人ひとありて能く我われに學まなば、同くともに仙葩せんばを看みん、と且かつつ歌うたひ且かつつ花はなの微紅びこうを嚙かむ。昌黎しやうらい敢あへて信しんぜず。韓かん湘やう又館またかん階かい前ぜんの牡丹ぼたん叢さうを指ゆびさして曰いはく、今いま、根ねあるのみ。叔公しやくこうもし花はなを欲ほつせば、我われ乃すなはち開ひらくかしめん。青黃紅白せいくわうこうはく、正暈倒暈せいうんたううん、淺深せんしんの紅くれなゐ、唯公めいが命めいのまゝ也なり。昌黎しやうらい其その放語はうごを憎にくみ、言いふがまゝに其その術じゆつをなせよと言いふ。猶いふし子しま先びやうづ屏風ぶを借かり得えて、庭にはに牡丹ぼたん叢さうを蔽おほひ、人ひとの窺ひとかふことを許ゆるさず。獨ひとり其その中なかにあり。窠くわの四方しほうを掘ほり、深ふかさ其その根ねに及および、廣ひろさ人ひとを容いれて坐ざす。唯紫粉たゝむらさきこと紅べにと白お粉しろいを齎もたらし入いるのみ。恁かくて旦あしたに暮くれに其その根ねを治をさむ。凡すべて一七日いちしちにち、術成じゆつなると稱しやうし、出いでて昌黎しやうらいに對たいして、はじめて羞はぢたる色いろあり。曰いはく、恨うらむらくは節遲せつおそきこと一月ひとつきなり、時既ときでに冬ふゆにして我わが思おもふがまゝならずと。然しかれども花開はなひらいて絢爛けんらんたり。昌黎しやうらい植ううる處ところ、牡丹ぼたんもと紫むらさき、今は白紅はくこうにして縁ふちおのゝ緑みどりに、月界げつかいの採虹玲瓏さいこうれいろうとして薰かをる。尚なほ且かつつ朶かはなごとに一聯いちれんの詩しあり。奇きなる哉かな、字じの色いろ分ぶん明みやうにして紫むらさきなり。瞳ひとみを定さだめてこれを読よめば――雲横くもしんれい秦嶺しんれい家何在よこたはつていへいづくにかある、雪擁ゆきらんくわん藍關らんを馬不前をようしてうますまず――

昌黎、時に其の意の何たるを知らず。既にして猶子が左道を喜ばず、教ふべからずと
して、江淮に追還す。

未だ幾干ならざるに、昌黎、朝に佛骨の表を奉るに因り、潮州に流されぬ。
八千の途、道に日暮れんとし偶雪降る。晦冥陰慘、雲冷たく、風寒く、征衣纔に黒
くして髪忽ち白し。嶺あり、天を遮り、關あり、地を鎖し、馬前まず、——馬前まず。——
孤影雪に碎けて濛々たる中に、唯見れば一簇の雲の霏々として薄く紅なるあり。風
に漂うて横ざまに吹き到る。日は暮れぬ。豈夕陽の印影ならんや。疑ふらくは紅涙
の雪を染むる事を。

袖を捲いて面を拂へば、遙に其の雲の中に、韓湘あり。唯一人、雪を冒して何處
よりともなく、やがて馬前に來る。其の蓑紛紛々として桃花を點じ、微笑して一揖す。
叔公其の後はと。昌黎、言ふこと能はず、涙先づ下る。韓湘曰く、今、公、花
間の文字を知れりや。昌黎、默然たり。時に後れたる從者辛うじて到る。昌
黎、顧みて、詢うて曰く、此の地何處ぞ。藍關にて候。さては、高きは秦嶺也。昌
黎、嗟嘆すること久うして曰く、吾今にして仙葩を視たり。汝のために彼の詩を全うせ
んと。韓文公が詩集のうちに、一封朝奏九重天——云々とあるもの則是。

於茲手を取りて泣きぬ。韓湘慰めて曰く、愴むこと勿れ、吾知る、公恙あらず、
且つ久しからずして朝廷又公を用ふと。別るゝ時一掬の雪を取つて、昌黎に與へ
て曰く、此のもの能く潮州の瘴霧を消さん、叔公、御機嫌よう。昌黎馬上
に是を受けて袖にすれば、其の雪香しく立處に花片となんぬとかや。

明治四十一年四月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花間文字

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>